

七つのエピソード

励ます……………3  
自信……………7

であい……………13  
共感……………19  
発見……………25

触れる……………30  
つながる……………36

エピソードに関連する

TJFの事業……………40

TJFを支援して

くださった方々……………46

# 励ます

約2万人の死者・行方不明者をもたらした東日本大震災。かつて経験したことのない大災害のなかで、人はことばの力を感じ、前に向かって歩みだした。

2011年3月11日。東日本大震災。

惨状は世界中に伝えられた。

巨大津波に打ち碎かれた膨大な瓦礫<sup>がれき</sup>の山。商店街に打ち上げられた船。堅牢さの片鱗すら残さず、鉄骨が剥き出しの原子炉建屋<sup>たてや</sup>。

想像をはるかに超える過酷な光景に、国の内外を問わず、励ましと再起を願うことばが、次々と寄せられた。

励ます  
中国・大連市の中学校から、日本語を学ぶ子どもたちの手になる折り鶴が送られてきた。鶴の羽には「がんばれ」「大丈夫?」「応援しています」といったメッセージが書き込まれ

ている。

大連の中学校では日本語が教えられている。その授業で生徒は「日本では何かを折るときに千羽鶴を折る」という文化を学んだ。

TJF(国際文化フォーラム)と地元教育機関が共同で制作した教材「好朋友ともだち」のなかで、鶴の折り方といっしょに千羽鶴の意味が紹介されているのだ。

今回被災した人たちのなかに自分たちと同年代の日本人がたくさんいる。彼らを励ますには何がいいかを考えた末、鶴を折ることにした。教材を見ながら鶴を折り、自分の気持ちを表すことばを考え、被災した仲間が届きますようにとメッセージをその折り鶴に託した。

つづられたメッセージは、自分たちが学び考えたことば。試験のために覚えた文例ではない。思いを日本語で表現した。まさに生きたことばの学びである。この鶴は気仙沼市の小中学校の子どもたちに届けられた。



大連から届いた折り鶴

生徒全員による「Believe」の大合唱が響きわたった。オーストラリアの西オーストラリア州教育省が7、8年生を対象に行った日本語ワークシヨップの最後のことだ。この歌は日本の小中学校でもよく合唱曲として歌われている。

たとえば君が 傷ついて くじけそうに なった時は  
かならず僕が そばにいて ささえてあげるよ その肩を  
世界中の 希望のせて この地球は まわってる

(作詞 杉本竜一 / JASRACH1110144-101)

この歌詞はまさにそのときの日本人に届けたいことばだった。

東日本大震災の惨状がニュースで流れると、オーストラリアでも日本語を教える先生、学ぶ子どもたちの間で「何かしたい」という思いは強まっていった。西オーストラリア州メルビルの小学生は校長先生に「募金を呼びかけたい。許可してほしい」と手紙を書いた。生徒が中心になって、日本を思い起こすように巻き寿司や焼きそばを作って、その売り上げを寄付した学校もある。

さまざまな形で被災した人びとへの熱い応援がわき起こっているときだけに、ワークシヨップではその思いにつながる活動をしたい、と担当の藤光由子先生は考えた。

「人を思いやったり、励ましたりするとき日本語でどう表現するのかを、実は教えていなかったんじゃないかと思っただけです」

励ます

ワークシヨップでは、まず「Believe」の歌詞カードを配った。カードには、読みをひらがなとローマ字でつづり、英語で意味を添えた。V6が歌う「Believe」をみんなで聴いたあと、友だちに元気がないときにあなたたちはどんなことばをかけるかと問いを投げかけた。いろいろな答えが出た。次に日本語にも人を励ますためのことばがたくさんあることを学ぶ。日本の友だちへの思いも膨らんだ。最後に、初めて聴いた「Believe」を合唱する。ワークシヨップを終えて、生徒が言った。

「歌うのは難しかったけど、日本の友だちのことが心配だったから、この歌を歌えてよかった」  
ワークシヨップに参加した生徒の何人もが、学校で「Believe」を歌っているという。学校から学校へ、「Believe」が静かに、しかし力強く広がっている。

ことばには励ます力がある。そのことを学んだ生徒たちはことばを使い始めた。日本語の語彙や表現を学ぶだけでなく、あらゆる壁を越えて他人を思いやる気持ち、そのときにことばが果たす役割を学んだ。「がんばろう」「大丈夫?」「応援しています」。ことばを現実から切り取られた形で学ぶのではなく、生きたものとして学ぶ。そして、学んだことばを相手に届ける。

ことばを介して人と人がつながった。

## 自信

新しいことばを学ぶ。それは新たな世界観をもつことだ。  
かくあらねばならぬ、という呪縛から解放され、自由な  
発想を得る。そして生きる自信につながっていく。

「私は中学校に入ってからすぐ、いじめが原因で学校に行けなくなっていました。精神的に疲れ、自信もなくなり、自分さえも見失っていました。そんな私を見かねた両親が半年に一度、韓国に連れて行ってくれました。後で知ったのですが、私は韓国に行くと顔が生き生きしていたということです。旅行はいつもフリーで行くため、私が終始、母や父の通訳をしなくてはならず、結構忙しく、食べた料理の味も覚えていないほどです」

「自分の韓国語が通じたときには、ものすごく嬉しくて感動しました。それと同時にニュアンスや表現の違いにぶつかり、自分の思いを相手に伝える難しさを知り、語学だけでは通用しない部分——歴史の重要性も強く感じました。こんな経験を何度も重ねていくうちに、『自信』というものが生まれ、今では堂々としていられるようになりました」

これは、2008年6月に開催された、第1回クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会韓国語スピーチ部門で、当時高校1年生だった茨城県の鈴木友美さんによるスピーチの一部だ。このスピーチで鈴木さんは優秀賞を受賞した。

鈴木さんは、韓国語と出会ったことが自分の生き方を変えたと訴えた。

鈴木さんは小学5年生のとき、子ども向け雑誌の韓国語コーナーでハンゲルに出会った。独特の幾何学的な図形を思わせる文字。これがひらがなやカタカナと同じであることに驚くと同時に、おもしろいと思った。

「このことばを読んで書けるようになりたい」

韓国に対してマイナスのイメージをもっている母は、自分が韓国語を勉強すると知ったら、反対するに違いない。そう思った鈴木さんは、こっそりNHKテレビの韓国語講座を見て独学を始めた。しかし、1年ほど経ったある日、母親に知られてしまう。

「何で韓国語なの？ やるなら英語にしなさい！」

強く言われたが、どうしてもあきらめられず韓国語の勉強を続けた。

韓国語を一所懸命に勉強する姿を見て、父親は小学校の卒業記念に韓国への家族旅行を提案する。人情厚い人びとに触れて、母親の意識も変わり、韓国をすっかり気に入ってく

れたことで、鈴木さんの学習熱はますます高まった。

しかし、中学校に入ると、人間関係にまずき不登校になり、自分の殻に閉じこもってしまう。両親は外とのつながりをもたせたくて、韓国語教室を探し、韓国旅行に連れ出した。韓国語教室で世代は違っても同じ関心をもつ人たちといっしょに勉強できることがとても嬉しかったと言う。韓国語が鈴木さんと外の世界をつないだ。

高校に通い始めた鈴木さんは、韓国語教室の先生に勧められてクムホ・アジアナ杯に出場することにした。自分と韓国語のこれまでの関係を原稿に書きおこしていくうちに、気づく。韓国の人たちとだんだんに意思疎通ができるようになって、また、いろいろな遺跡を見学して、日韓の歴史的なぶつかりについて考えたりするうちに、好奇心いっぱいでも関心をもつ小学生だった頃の自分を少しずつ取り戻していることに。韓国語を学び、韓国の人たちとやりとりするうちに、自信を失う前の自分に戻っていたのだ。

大会で優秀賞を受賞したことはさらに大きな自信へとつながった。

「初めて人に認めてもらったような気がします。私が今までやってきたことは間違いではなかった。私はこれでいいんだと思いました。だから、その後の高校生活はとても楽しく過ごせました」



韓国語を学んで、自信を取り戻した鈴木さん

なぜ、ほかの国のことばを学ぶことで、自信や、生きる力がもたらされるのか。

冒頭のスピーチに外国語を学ぶ喜びや、醍醐味が述べられている。

一つは、新しいことばが通じる喜びだ。独特の文字、ハングル。激したり、語尾を繊細に発音したり、変化させることで微妙なニュアンスを伝える。韓

国の人と同じように、この文字や発音を使って、感情を表現し、人と議論する。その輪のなかに入れることで、他者とのコミュニケーションの回路が一つ増える。その喜び。

また、ことばを学ぶことで、異なる文化があることを知る。日本に生まれてからずっと習慣づけられてきた、あるいはあたり前のこととしてみなされてきた行動が、彼の地では異なる実感する。

新しいコミュニケーション回路に触れ、新しい文化に触れるなかで、鈴木さんの心のかから、ある種のこわばりがとれていったのではないか。世界が広がり、自分を再発見で

きたのではないか。それは新しい世界観の獲得でもある。

鈴木さんは大会後も韓国語学習に打ち込み、卒業時には韓国語能力試験の最上級である6級に合格するほどまでに上達した。今は、大学で外国語学部韓国語学科に籍をおく。自分と韓国語を幼なじみのような関係と表現する。一生離れることなく自然につきあっているような身近な関係が韓国語との間にある。

スピーチの最後に語った、「日韓の架け橋になりたい」という思いは今も変わらない。だから、日韓の間にいまだに存在する溝を少しでも埋めたいと思う。日本による植民地時代について、韓国の教科書は相当な分量を割いて詳しく記している。しかし、日本の教科書にはほとんど載っていない。圧倒的に知識量が違う。知識量が対等になればお互いの理解が深まるのではないかと思う。

「日本のことを外国人に説明できる人になりたい。そして、日本人には韓国のことを知ってもらいたい。」

新しいことばの学びが、自分を取り戻すきっかけになることがある。自信をもたらすことがある。同時に一生かけて考えていくべき新しい問題を発見することもある。

自分が韓国語を学んだことで、母親の韓国に対する態度は変わった。偏見がなくなり、「ここに住んでもいい」というほど好きになった。そして、中学時代に、立ち直れないか

もしれないとまで思っていた自分が、本当の自分を取り戻し、見ず知らずの人とコミュニケーションをとりたがるほど、自信をもって生きられるようになった。  
鈴木さんは冒頭のスピーチに、「奇跡」とタイトルをつけた。

## であい

遠く離れていても、「であい」はたくさんある。それを実現するのもまたことばの力である。

重さ10キロの箱から主人公が飛び出す。

A3判サイズの、厚み10センチはある箱を開けると、そこには実在する高校生たちの生活の断片を撮った写真が入っている。主人公は日本の高校生男女7人。写真は全部で192枚。1人あたり30枚弱だ。主人公の住む場所、家族、趣味、起きてから夜寝るまでの1日の暮らしを追い、分厚いボード紙に印刷された写真の裏には、シーンごとに説明文が日本語と英語で記されている。

7人は、出身地から育った環境、通っている学校までさまざまだ。北海道、東京、神奈川県、京都、大阪、兵庫、沖縄と全国にまたがる。「獣医をめざして家族のいる千葉から離れ、北海道の高校で寮生活を送る女子」「大阪のインターナショナルスクールに通う在日韓国



写真教材「であい 7人の高校生の素顔」

人3世の女子」「単位制の東京の高校で学ぶミステリー作家志望の男子」「6人兄弟の長男で生まれ育った島から離れ、沖縄本島に一人で下宿して高校に通うシンガーソングライター志望の男子」など、夢も生活スタイルもバラバラだ。

写真は、そんな彼らのありのままをスナップとしてとらえ続けた。「やらせ」は一切ない。7人あわせて1万枚あまりのなかから厳選した192枚が「教材」として選ばれた。アメリカやオーストラリアなどの高校で日本語を学ぶ生徒のためにTJFが制作した写真教材「であい 7人の高校生の素顔」だ。

想像してみてもほしい。あなたが学校で英語を学んでいたいときに、アメリカの高校生と直接英語で会話ができれば、どれだけ授業が楽しくなっただろうか。

直接会話ができなくてもいい。英語を母語とする外国の高校生から、写真と日記が届く。

そこに詰まった、異国の同世代が過ごす等身大の日常生活には、大いに関心がそえられるのではないか。アメリカの高校生はテストの成績が上がれば喜ぶのだろうか。好きな人への自分の気持ちを伝えるかどうか、悩むのだろうか。親と話をしているやりきれなさを感じることがないのか。学校にいじめはあるのか。どんなアルバイトをしているだろうか。聞いてみたいことはたくさんあったにちがいない。

私たちが習った英語の教科書にだって確かに同世代の若者は登場する。しかし「トム」や「ナンシー」は学習のために作られたステレオタイプな若者だとすぐにわかってしまう。「ナンシーは昨日母親に花をプレゼントしました」という例文に登場させるための人物なのだ。

日本の高校生も昼食にハンバーガーを食べ、課外活動でアメリカンフットボールをする。主人公の一人、聴覚に障害をもつ隆幸は、アメフト部に所属している。聴こえない自分のためにメンバーがブロックサインを作ってくれていると彼は語る。自分たちの好きなアメフトをやっている隆幸に、アメリカの高校生は驚く。

「であい」の主人公は、日本の典型的な高校生でもなければ、そういう役柄を演じているわけでもない。TJFが教材の趣旨と意義を伝え、本人はもちろん家族や学校関係者にも了解をもらって取材、撮影した。日本に行けば会えるかもしれない、普通の高校生だ。



彼らが何の演出もなく、淡々と日常を披露し、それを自分自身のことばで語ったことは、アメリカの高校生にも影響を与えた。

「『であい』の主人公はみな、自分の長所、短所、好きなこと、嫌いなことについて率直かつオープンに語っています。そのおかげで、生徒も心を開き、自分のことを気軽にクラスメートに話せるようになるのです」(ジョアン・シェイバー先生／アメリカ・バージニア州高校日本語担当)

他者の率直な気持ちを聞くことで、心のバリアを開き、他者とことばをかわす。気負いやてらいを捨てて、自分の気持ちを真っ直ぐに伝える。このことが他者との真の共感に結びつく。

ことばが人と人との「共感」のための道具であることを、「であい」に登場する7人の高校生たちは知らない間に証明していたといえるだろう。そして「共感を仲立ちすることばの力」を、日本から遠く離れたアメリカの高校生が体得することになる。

「主人公がもっている興味、悩み、将来の夢について、生徒から自然に疑問がわいてきます。ですから、コミュニケーションの目的を設定しやすい。また、主人公を通して、日本の中高生が自分たちと同じだと具体的に知ることは、他者理解、自己理解につながります。(中略)

7人の個性がはっきりと出ているから、比較もしやすく、日本の高校生の多様性も理解しやすい。それは日本の社会の多様性への理解にもつながり、ステレオタイプな思考の回避につながります」(バーバー・悦子先生／アメリカ・テキサス州高校日本語担当)

実際に「であい」を使って学んだアメリカの高校生たちの声を聞いてみると、「日本の高校生の生活は退屈だろうと思っていたけど、けっこうおもしろい人生を送ってる」「日本の生徒は学校のことしか考えてないと思ってたけど、ほかにもいろんなことを楽しんで、わたしたちは似たような人生を送っていると思う」「日本の高校生に『出会えて』楽しかった」と、「であい」の主人公との触れ合いを楽しんでいる様子がうかがえる。7人の趣味や考えを知ること、それぞれにファンもできた。「俊一に会うにはどうしたらいいんだろうか」「功二郎の飼っている犬はほくが飼っている犬と同じだ。情報交換したい」と自然な希望も次々と出てくる。「トム」や「ナンシー」にはファンもできないし、語り合いたいと思った人はいないはずだ。

そして、なかには、自分自身を「であい」の主人公と重ね合わせて、社会・国家と個人の関係、そのなかでのことばの問題にまで思いを馳せる高校生もいた。「『であい』の主人公の生活を知って、自分の生活についても考えた。もし自分が『であい』の主人公だった

ら、何を言い、何を書くだろう」「『であい』の主人公について知るうちに、アメリカという国は自分にどんな影響を与えているんだろうと考えるようになった」

日本の高校生が自分のありのままを伝えることで、「であい」は他国の高校生を映し出す鏡となった。

それまで一度も話したことのなかった「であい」の主人公7人は、すべての撮影が終了した2001年4月、東京に集まった。同じ経験をした7人だけがわかり得るある種の到達点があったのだろう。気負いもなく、久しぶりに再会した旧友のように、時を惜しんで語り合った。7人は初対面にしてすでに強い連帯感をもっていたようだ。

「であい」3000セットは30カ国の高校に贈られた。その先々で、7人に出会い、対話した高校生は数え切れない。

## 共感

ことは通じなくても交流することはできる——そうかも知れない。だが、通じたほうがより深く心は通わせられる。

伊是名島は、沖縄本島北部の運天港から船で北西へ約27キロ。人口1800、周囲約16キロの小さな島だ。この島に日本の高校生7人と、日本語を学んでいるアメリカ、イギリス、オーストラリア、韓国、中国、ニュージーランドの高校生7人が集まった。

写真教材「であい」で、個性豊かな主人公を教室に迎え入れた各国の中高校生たちは、今度は自分たちのことを語りたい、と思うようになった。「であい」のなかで日本の高校生たちが悩みや苦しみを率直に語ったことに触発されたのはいうまでもない。

こうして、「であいフォトエッセイカフェ」は始まった。「であい」で日本語を学んだ世界各地の生徒から寄せられたフォトエッセイがウェブサイトで紹介された。フォトエッセ

イには、「であい」の誰に共感し、何に興味をもったのが率直に語られていた。もちろん、自分の悩みや心の内も自分のことばでつづられていた。

「私は自分の感情を外に表すことが苦手なので、未知（「であい」の主人公の一人）が、弱いところを見せてくれる友人に元気づけられていると書いている部分を読んだとき、私は自分あまりそうしていないことに気づきました。私には自分の弱みを見せられる友人は少ししかいませんが、もしかしたら全く傷つかないでいるよりも頻繁に傷つくことで、強い人間になることができるのかもしれない」（オーストラリア）

「わたしはモン族（ラオス、ミャンマー、ベトナムなどに住む山岳少数民族）で、モン文化はわたしの人生の大切な一部です。わたしはアメリカに生まれ育ち、モン族の文化を受け継いで発展させていくチャンスに恵まれたことを感謝しています。でも、モン族の文化はだんだん消えていこうとしています。モン族の文化とアメリカの文化のバランスをうまくとるのは難しい（中略）。二つの文化のぶつかり合いは、わたしという人間の重要な一部となり、その衝突のなかでわたしは強くなれると思う」（モリー、アメリカ）

飾らないことばで問いかけてくる同世代に、共感のコメントが書き込まれた。世界の仲間がウェブサイトで出会ったのだ。

「であい」の流れはとどまるどころを知らない。みんなが集まりフォトエッセイを作ろうと考える。「であい」の連鎖は、さらに次のステップへと進んだ。

受け入れメンバーとして決まった日本の高校生7人が、寄せられたフォトエッセイのなかから「この子に会ってみたい」と思う7人を選んだ。こうして14人は伊是名島に集まった。

伊是名島は、写真教材「であい」に登場する主人公の一人、俊一（のふるさとだ。「であい」

で、「生まれ育った島から離れ、沖縄本島に一人下宿して高校に通うシンガーソングライター志望の男子」として俊一を知った高校生たちは、大学生になった俊一に伊是名島で実際に会い、さらに、俊一の幼なじみや先輩など、伊是名島の人たちにも出会った。

14人は三つのグループにわかれ、それぞれがテーマを決めて伊是名島を紹介するフォトエッセイ作りに取り組んだ。彼らを選んだテーマは何か。独特な形状をした沖縄の墓と死についての考え方に興味をもったグループ



沖縄の「死生観」を日英中韓の4言語で  
まとめたフォトエッセイ

は「死生観」を選んだ。島の美しい自然に感動したグループは、海岸にごみを見つけたことから「ごみ問題」を、島の尚円太鼓の力強い音に感動したグループは「音楽の力」をテーマにした。グループごとに、伊是名島の人たちにインタビュしながら、自分の意見や経験を語り合い、どうまとめていくかを話し合いながら、一つの作品を作っていた。

こう述べる、和気藹々とした活発なやりとりを思い浮かべるかもしれない。だが、初めて会う者同士が母語ではない言語でやりとりするのである。乗り越えなければならぬさまざまな壁があった。

「仲良くなるためには、なんとなくことばが通じれば、あとはジェスチャーや気持ちでいろいろ話せたけど、グループで物事を決めるときにはそうはいきませんでした。やっぱり話し合うためにはことばが必要だと強く感じました」（まや、日本）

二つの異なった通じるレベル。つまり「なんとなく通じる」と、「グループで物事を決める」ために必要なレベル。このプロジェクトに参加しなければ、おそらくその違いを自覚することは難しかっただろう。

もちろん、物事を決めるには、外国語の成績が問題ではない。自分の意見を理解してもらうにはどう伝えたいのか、人を説得するにはどうしたらいいのか。母語であっても同じ壁が立ちほだかる。

それだけにコミュニケーションがとれたときの達成感は大い。

「このプロジェクトに参加するまで、私は面倒くさくて、団体行動に進んで参加しようとはあまり思いませんでした。でも、みんなで協力して作りあげる喜びや、やりきったときの達成感を知ったので、それが今では快感となり、やみつきになってしまいました。人とつながっているってこんなに楽しいんだ！ っ」（金、日本）

文化の違いを実感しながらも、その違いは乗り越えられないものではないことを知る。また逆に同世代の悩みや関心に国の違いはないとわかる。

「ほかの人の文化を知ること、自分自身の文化についてもたくさん学びました。また、いろいろな考えをもつ参加者と出会い、以前よりほかの人を受け入れられるようになりました。たとえ何かで意見が対立しても、その人の別の面を見ればすばらしいところがあるのです」（ロージー、イギリス）

互いを理解することで、テーマは深く掘り下げられ、視点も明確になっていく。その過程でまさにことばの力を思い知らされることになる。日本語を中心に、彼らはことばで考えを共有していった。協働作業でなければできない経験である。

「このプロジェクトでは意思疎通しないと前に進むことができないので、どうしても伝えやめる！ という気持ち自然に芽生えてきて、気持ち悪いほど辞書を片手に話しかけま

した」(コー、日本)

ことばは使ってみることが何より重要だ。片言でも使ってみること。勇気を出して伝えることで、他者と心の交流を図る。語学力よりもはるかに普遍性のある「生きるための力」を得ることができる。

伊是名島での最終日。14人と島の人たちが浜辺に集まった。

イギリスから参加したロージーが一語一語かみしめるように言った。

「よかった、

おもしろかった、

楽しかった、

すごかった、

すばらしかった、

and……

伊是名島とみなさん、

だいすきです！」

## 発見

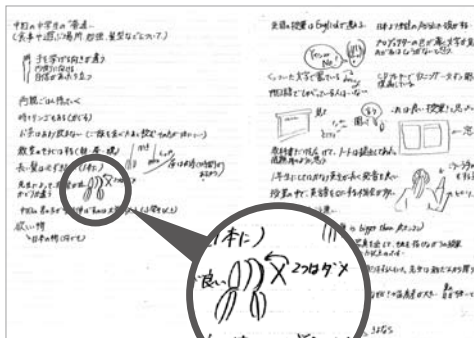
国が異なれば生活様式や習慣は異なる。その「違い」を知  
ることは、その後の生き方に大きな影響をもたらす。心を  
まっさらにして、異文化に飛び込み、ありのままに触れる  
ことだ。

こんなに細かいところまで見ていたんだと感心するほど、彼女の観察は細部にわたって  
いた。中国・大連の中学校を「好朋友特使」として訪ねた横浜の中学生ひーなりのノート  
につづられたメモには、中学生らしい素朴な視点からのさまざまな「発見」が満ちあふれ  
ている。

・中国の学校では拳手のとき、手の向きが違う。手のひらは自分のほうに向けて、教師  
には手の甲を見せる。また自信がある生徒は拳手だけでなく自ら起立する。

・どこの教室にも掛け軸がある。

・女子で長い髪を結んでいない子はいない。しかも全員が1本に結ぶ。(左右)2本に  
(わけて)結ぶのは禁止のようだ。男子はみな短髪。



ひーなーのノート

・蛍光灯が9本ぶら下がっている。だが点灯されてはいない。  
 ・教室の掃除を朝、昼、夕に行う。最も力を入れるのは昼。  
 これらはほんの一例だ。ここに書かれたことが中国で一般に行われているとは限らない。訪問した中学校だけのルールの可能性もある。だが、直接触れなければわからない発見が世の中には無数にあることをひーなーは知った。

ひーなーが参加した「好朋友特使」は、調べてみれば、マンガの主人公が実際に大連に送り込まれたようなものだ。

大連市教育局の傘下にある大連教育学院とTJFが共同で制作した、中学生向けの日本語教材『好朋友ともだち』はストーリーマンガが中心に据えられている。主人公は横浜に住む女子中学生。父親の仕事で大連の中学に転校するところから物語は始まる。主人公美佳は、不安を抱えながらも、温かく差し伸べられる級友の手助けで、クラスに溶け込んでいく。

一般の教科書のように文法や例文を盛り込むのではなく、場面場面で使われる日本語を学んでいく構成だ。日本語と中国語の台詞が交じっているが、話が進むにしたがって、つ

まり日本語学習が進むにしたがって、日本語の台詞が多くなっていく。

この美佳と同じ「横浜の中学生」に大連に来てもらって、日本語を学ぶ中学生との出会いの場を作りたい。そんな思いが日中双方の関係者に沸き起こった。そこで、実現したのがひーなーも参加した「好朋友特使」である。

大連で数日過ごすうちに、発見メモはどんどん増えていった。

「歓迎夕食会での一番の驚き……どうしてお茶が出てこないんだろう」その後、訪問した中学校の給食でも、招かれた家庭での夕食でもお茶が出てこない。「なぜなんだろう」

大きくなった疑問を大連の中学生に聞いてみた。すると、「ご飯のときにお茶を飲むと、口のなかでかんでいるものまでいっしょに飲み込んでしまうから、体に悪いと思う」と答えが返ってきた。

「こんな理由があるとは思っていませんでした。『中国の人、変だね』と決めつけていた自分が恥ずかしく思えてきました」

今まで疑問に思っていたことにも理由があるに違いない、と気づく。自分の常識はすべての常識ではないし、自分の常識が逆におかしいかもしれない。自分の思い込みが偏見につながるのではないかと考えをめぐらすことになった。

「これからは見つけた『違い』について、声を出して理由を聞きたいと思います」

「好朋友特使」で訪問した日本の中学生7人は、中国語を学んでいる生徒ではなかった。中国語を学んでいる高校生が中国を訪れたら何をどう感じるだろうか。

2007年に始まった「漢語橋 日本の高校生サマーキャンプ」は、中国語と中国文化の普及を進める機関、中国国家漢弁が主催し、TJFが企画、実施している。毎年約90名の高校生が中国に10日間滞在する。みな中国語を学んでいる高校生だ。

現地の先生による中国語の授業では、日本語は一切ない。4日間で22コマの授業をうける。朝8時から夕方5時まで中国語のシャワーを浴び続ける日もある。

入門、初級、中級とレベルわけされるものの、先生の発言がほとんどわからず時間が過ぎるのを待つ、という生徒もいるにちがいない。隣の子はわかっているのに、自分だけがわからないという悔しさ、焦り、苛立ち。

「最初は先生の話していることばの意味がわからなくて、先生に質問されてもオロオロして先生を困らせてしまいました」

「初日は言っている意味がわからず、辞書を使っても追いつかずとても苦労しました」  
わからない生徒にも先生は優しく何度も繰り返ししてくれる。それに応えようと目を向け、

耳を研ぎ澄ましている生徒の姿がそこにある。

教室で得たことは、その後、街に出て、家庭を訪れて、高校生と交流して、実感することになる。

最初、自分の名前しか言えず、授業がつかかった生徒。

「家庭訪問したとき、自己紹介が通じました。市場で値引きがちゃんとできました！ わかってもらえたとき、本当に嬉しかったです」

簡単なことだったとしても、通じたときの喜びは大きい。何よりも人に話しかけようと  
する勇気につながる。

ただ見るだけでは、見た目の違いしかわからない。話してみても気づく発見がある。食堂のお兄さんに質問をしていてシヨックをうける。

「『日本は好きですか』と聞いたとき、少し曇った顔をして何も言ってくれませんでした。その次に『日本人は好きですか』と聞いたらずいなくれました。それから、『私たちのことは好きですか』と聞いたら、笑顔でうなずいてくれました」

直接触れ合うことで「違い」が発見される。同時に「違っていい部分」もわかる。思  
い込みのない真の人間関係は「発見」の連続といっていだらう。

# 触れる

空から森の美しさを見ただけでは、森の木々の下で蠢く生命の豊かさはわからない。文化は根差すことばにこそ、その特徴が滲み出ている。ことばを学ぶことは文化に触れること。それは森に入って生命に直接触れることに似ている。

ことばを教える側の先生たちの思いは、そもそもどこにあるのだろうか。

神奈川の県立高校で韓国語を教える山下誠先生。山下先生は社会科の教師でもある。授業で感じた問題意識から、地理の授業で韓国語に触れさせることを試みた。

「日頃人なつくく明るい生徒が、授業で韓国・朝鮮に話題が及んだ際に、猛烈に反発して差別意識や蔑視感情をあらわにしたり、無関心であったりすることが気にかかっていました。しかし、彼らは大人たちがこれまで在日の人びとを公然と迫害してきたことを肌で感じて知っていて、大人たちの矛盾を拡大して映しているに過ぎません。考えた末、ことばに触れることがひよっとして彼らを変えるきっかけになるのではと思いあたったのです」ここで山下先生が「ことばに触れること」という表現を使っていることに注目したい。

日本の学校で外国語というと英語。誰もが何の疑問もたず、英語の単語帳を作ったり、文法問題を解いたりする。受験のため、成績のため、就職のために。

だが、山下先生は「触れる」ことを大事にした。それは先生のことばを使えば「身体的な、心のなかからその国、民族を認識しようとする」とである。山下先生はこうも述べている。

「韓国語に触れることは、『俯瞰的作業』である地理教育を温もりによって補強することになるのではないかと思っています」

ことばに触れることは生きた文化に触れること。空から森の美しさを見るだけでは、そのなかに生息するたくさんの生き物の温もりに触れることはできない。地理教育が「空から見る」とあるのに対して、ことばに触れ文化に触れることは、森に降り立ち生き物の息吹を感じることに等しい。異文化理解のための重要な手段なのだ。

ところで、「文化」とは何か。このことばは使う人によってその奥行きが異なる。ここでいう「文化」とは、本に書かれた思想体系や芸術作品などに限定するものではない。生活様式や習慣、物事の考え方、感じ方の集積といっていいたいだろう。つまり、人間の営みの体系全体をさす。このような広い意味での「文化」の相互理解が重要になってくる。そこに子ど



「もたちが直に触れ合い、直にわかり合い、「ことば」を獲得していく形で異文化理解が浮上する。

「日本のことが好きなのに、なぜか素直に好きと言えない。日本人の友だちができると嬉しいのに、人前では喜べない」

そういうことがずっとあったと語る安貞子先生アソジョンジャは、韓国の大学で日本語を学び、いま韓国・釜山の小学校で日本語を教えている。日韓の不幸な歴史が先生の素直な気持ちにブレーキをかけていたのだろう。

韓国で日本語を学ぶ中高校生は87万人に上る。この数字は世界のなかで抜きん出て多い。しかし、そんな韓国でも日本語教育を実施している小学校となると数は少ない。

「もう少し早く日本語や日本人に出会い、友だちになっていたら、こんな思いはしなくてすんだかもしれない」

小学校で教え始めて11年。この思いは確信に近いものになった。安先生が教える学校では、5、6年生全員が週1コマ、日本語を学び、年に1回福岡の小学校とお互いに訪問し合う。日本語を習得することよりも、日本の小学生と交流する姿勢をもつようになることが目標だ。

「ひらがなとカタカナを覚えたい」「日本人の友だちをつくりたい」「日本人と日本語で話したい」、そう素直に眼を輝かせる子どもたちが今日も日本語を学んでいる。

毎年、高校生数人を日本に引率するアメリカ・ウイスコンシン州のリン・セスラー先生は、自分がクラスでつけていた成績はなんだったんだろうか、と考えた。

「日本に旅行に来たときいちばん活躍していたのは、日本語のクラスでは成績がいちばん下の生徒でした」

学校の成績がよくても日本に行つてコミュニケーションがとれないのでは意味がない。何が必要なのか。電車のなかで、生徒の何人かはずっとイヤホンをして音楽を聴いている。何人かは騒いでいる。

「耳を澄まして、目を見開いて！」

せっかく機会があつても、体と心が閉じていたのでは、何にも触れられない。いろいろなものをしっかりと見る、聞く、ことばを発することが大事だ。間違ふことは恥ずかしいことではない。

セスラー先生が教える学校の学区では、幼稚園から高校まで日本語が学べるカリキュラムがある。小学校では全員が日本語の授業をうける。もつとも長ければ13年、日本語を学

ぶことができる。しかし、ほとんどの生徒は日本語とは関係ない道に進む。日本語を学ぶということは、日本語が話せるようになるだけではない。自分では見えないものが見える鏡を手にするのだ。その鏡は新しく出会う文化に対しても使える。その鏡を手に入れて、意味のある人間関係を築くことができる。

「ナヅチュウ」

以前、親しい人から自分がこう呼ばれていることを知って胡興智先生は驚いた。

あいづちも打たないでじっと目を見て日本人の妻の話を聞いていると、「聞いている？」と不愉快そうに確認された。招かれた友人宅に菊の花束を持っていったこともある。日常のなかでいくらかでもある小さな行き違い。そんなことから、謎の中国人Ⅱ謎中となったというわけだ。胡先生はこの謎を織り交ぜながら、中国語を語学学校や高校で教える。

うなずいて聞いているのに不思議な顔を中国人がするのはなぜか、日本人からすぐにお返しをもらって中国人がさびしく感じるのはなぜか。

謎の答えはすぐには明かさない。そもそも答えがないことも多い。生徒がそれぞれに謎を解く、ときには友だちと解答を言い合ってみる。そのプロセスが重要なのだ。

「異なる発想や行動パターンを提示することで、生徒たちに多くの選択肢を与えることが

できるのではないかと思います」

多くの選択肢を手に入れることは大木が豊かな枝葉をもつことに似ている。

「生徒が日本に対してどのようなイメージをもつのかは、日本語教師の影響が大きい」

教師は固定観念や先入観をもっていないか、常に自分自身を厳しく見つめる必要がある。中国・山東省の石濤先生は、以前の自分を振り返りながら、そう語る。

「『日本人は働さずさます』『日本は男性中心の社会です』と授業でよく言っていました」文化は変わる。ことばも変わる。

生徒も教師も、ことばに触れ、人と触れ合うことを積み重ねて、お互いを理解し合う端緒につける。そして相手の文化に触れた若者たちがそれぞれの国で次代を担う主役になる。道のりは長いかもしれないが、そのとき、人と人とのつながりに何より重い価値を見出す世の中となるにちがいない。

「韓国の人びとに今でも反日感情があることに對して、以前は諦めの念をもっていました。韓国語を学んでからは、それを覚えていきたいという意欲が出て、積極的に考えられるようになりました」

「韓国語を学んだある生徒のことばである。ことばに触れることが、未来を変えていくにちがいない。」

# つながる

新しいことばに触れ、学び、新しい文化を感じとって、理解する。そして、人びととつながる。同じ願いをもつさまざまな人たちと手を携えて、一歩ずつ前に進む。

「今度は恩返しの意味でも、日本の中国語教育を支援したい」  
中国大使館一等書記官だった胡志平氏の内に秘めた思いはさまざまな形で具現化される。

日中の政府レベルで合意に達し、日本の高校の中国語教師を対象とする中国研修が2004年に始まった。長春で毎年開かれるこの研修は、約20日間、大学の寄宿舎に泊まり、中国語と教授法の授業を中国人の先生から中国語でうける。滞在費と受講料はすべて主催者である中国国家漢弁（中国語と中国文化の普及を目的とする政府機関）が負担している。2011年までに日本の高校で中国語を教える教師の4分の1にあたる約130名が参加した。

「中国語を学んでいる高校生に自分の眼で中国を見てもらいたい」そう願って、漢弁に直談判し、毎年日本の高校生約90名が中国を訪れる道も開いた。

中学から大学まで日本語教育をうけてきた胡氏にとって、1980年代初めに、日本が大学の日本語教師約400名を養成したことへの恩返しなのだ。

「韓国人が日本語を話しても日本人を感動させることはできないが、日本人がたった一言韓国語を口にするだけで韓国人を感動させてしまう……」

ライフワークを探し求めながら、「ふと気づいたら日本に捕まっていた」と語る韓国大使館韓国文化院の金琴平氏はいつもそう感じていた。

1998年6月、金氏はTJFに、日本で韓国語を教える教師の研修を開きたいと相談をもちかけた。高校の韓国語教育の実態についてすでに調査していたTJFは、高校の教師を対象にすることを提案。そして、2ヵ月後に東京で韓国語教師研修が実現した。韓流ブームが起るだいたい前のことである。当時、全国約5500校のうち、韓国語教育を行っていた高校はわずか100校あまり。どの高校で韓国語の授業が行われているのか、どんな先生がいるのか何もわからない状況だった。そんななか、たった2ヵ月の準備期間で34名が集まった。全国規模で開かれたのは初めて。集まった先生は驚いた。こんなに仲間が

いる、自分一人ではないのだと。

「韓国語を教える日本人教師と韓国語を学ぶ日本人の学生というのは、実は韓国では想像しにくいイメージ」「私の仕事は韓国からのメッセージを日本人に伝え、ありのままの『日本』を韓国人に知らせることを同じ割合でやりとげることだ」

金氏と韓国語を教える日本の先生たちが出会った。

中国国内でも日本語教育が盛んな地域とそうでない地域がある。東北部に位置する遼寧省は最も盛んで、大連市の小中高校の日本語教育は、歴史的、経済的背景から、学校の数や内容において群を抜いている。

2005年10月、日本に招いた教育代表団のなかに、大連市教育局副局長の王允慶氏ワンユンギョクはいた。5日間の滞在中さまざまな交流や意見交換が行われたが、王氏の並々ならぬ日本語教育推進への熱意が明確になったのは帰国後すぐのことだった。王氏は、「日中の子どもたちをつなぐ」というTJFと同じ夢に向かって走り始めた。日本の子どもが中国語を、中国の子どもが日本語を学ぶ。その子どもたちが交流する。

わずか1カ月後には、日本語教育の拠点となる日本語教育学習研究センターを設立。翌年4月には、大連市教育局が「小中高校における日本語教育の強化に関する指導意見」を

発表。衰退していた中高校の第一外国語としての日本語教育を見直すと同時に、第二外国語としての日本語教育の導入が決まった。

「最近子どもたちの関係が冷たくなっているのではないか。地球の温暖化には反対だが、人間関係の温暖化は進めなくてはいけない。そのためにもコミュニケーションを図る力を身につけさせたい。子どもたちは外国語を学ぶことで、新しい世界を知り、ほかの人たちを知ることができる。これこそが多文化共生の社会へ通じるだろう」

日本語学習教材『好朋友』の編集会合で王氏は熱く語った。このことは、「人間関係の温暖化」と「多文化共生」という教材の理念になった。『好朋友』を使って日本語を学ぶ大連の中学生は約5500人を数える。遼寧省、吉林省、黒龍江省の東北三省を出発点に中国全土に『好朋友』の心がつながっていくのもそう遠いことではない。

国を問わず、同じ夢、同じ願いをもつ人がいる。一人の人とのであいで開かれた道。同じ思いをもつ多くの人に受け継がれ、道は続き、確かなものになっていく。そして、また新たな道が切り開かれる。

TJFはこれからも同じ思いをもつ人たちと共に歩んでいくことを願っている。

## エピソードに関連する事業

### ●励ます

『好朋友ともだち』（全5巻）は、中学校向け第二外国語としての日本語用教材。TJFが大連市教育局の要請を受け、2006年から2009年までの3年をかけて大連教育学院と共同で編集、制作した。日本側と中国側、それぞれに編集委員会を設置し、中国側は中学の日本語教師や教育学院の日本語教員（日本の指導主事にあたる）が編集委員となり、日本側は中国の中等教育の状況について詳しい日本語教育専門家が編集委員を務めた。教材の理念である「人間関係の温暖化」と「多文化共生社会」を教材にどう反映するのか、その考え方を日中で共有するのに多くの時間とエネルギーを注いだ。

もともと中国東北三省（吉林省、黒龍江省、遼寧省）は歴史的な経緯から、初等中等教育で第一外国語として日本語教育が盛んに行われていた。それを維持・発展す

三省に二外日本語の裾野を広げるために、日本語教育の拠点校の管理職や地域の教育行政者も日本に招聘している。大連市に端を発した二外日本語教育は、東北三省において少しずつ広がりを見せている。現在、大連市内をはじめ、三省各地の中学校で、『好朋友』を使って日本語を学んでいる生徒は七千人を超える。これを全土に拡げるために、北京にある外語教学与研究出版社による市販化が予定されている。

### ●自信

2008年、クムホ・アジアナ文化財団、駐日韓国大使館韓国文化院、日中韓文化交流フォーラム、TJFの四者共催で、第1回クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会が開催された（以後毎年開催。TJFは第3回まで共催）。韓国語スピーチ部門、韓国語スキット部門（韓国語初心者を対象とし、課題の韓国語の台本を2人で演じる）で、韓国語学習を奨励するとともに、日本語エッセイ部門を設けることで韓国や韓国文化に関心をもっている高校生を対象に含め、韓国語学

るために、TJFは1990年代後半から各省の教育行政機関と共催して日本語教師研修を実施したり、遼寧省が取り組んだ小学校の日本語教科書制作に協力するなどさまざまな支援を行ってきた。しかし、21世紀に入ってから英語が普及するにつれ、日本語教育は衰退の途をたどってきた。日本語教育を存続させるために、第二外国語としての日本語（二外日本語）が導入されること、日中の日本語教育関係者の間で期待されていた。二外日本語導入のきっかけは、エピソード「つながる」（36ページ）で紹介しているとおりである。中国の行政として初の試みであっただけに、手探り状態での出発であった。『好朋友』を共同編集する過程で、受験のための日本語ではなく、週1、2コマの授業で国際理解及び日中交流のための日本語をどのように教えていくか模索し、二外日本語向けの教師研修も行ってきた。大連市以外の東北

習の裾野を広げたいと考えた。日本語エッセイ部門の応募数は予想を超え、全応募の約4割を占めた。

韓国語スキット部門は、駐日韓国大使館韓国文化院、駐大阪韓国総領事館韓国文化院などが主催する「話してみよう韓国語」地方大会（TJF後援、2011年現在10都市で開催）と連携しており、各大会の高校生スキット部門の優秀者はクムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会の本選に出場できる。

### ●であい

写真教材「であい」7人の高校生の素顔」は1999年から3年の歳月をかけ、国内外の多くの日本語教育専門家の助言を得て制作した。教材キットは写真やエッセイなどの素材提供に徹し、日本語学習用の材料、文化情報、それらを使った授業案や活動案などの資料はウェブサイトで提供することにした。紙とウェブの連携を図った最初の試みだった。このことは「であい」キットの使用を日本語教育に限らず、社会科まで広げることにつながった。2004年に国際交流基金日米センターが開発

した日本理解教育カリキュラム「Snapshots from Japan: The Lives of Seven Japanese High School Students」には、「『であい』を素材として使用した授業案が収録されている。

高校生の素顔を海外に発信する事業としてほかに、高校生自身が身近な高校生を写真と文章で紹介する「高校生のフォトメッセージコンテスト」(1997、2006)を行った。全10回の応募数は2348。現在もウェブサイトに入賞作品を掲載している。コンテストの趣旨を引き継ぐ形で2008年によるみうり写真大賞(読売新聞社主催)高校生部門に「フォト&エッセーの部」が新設された。TJFはこの部門を後援し、海外への広報に協力している。入賞作品を、英訳したエッセーとともに、TJFのウェブサイトに掲載し、国内外の高校生に向けた発信を継続している。

さらに、現代日本を海外に発信する事業として力を入れているのがウェブサイト「くりっくにっぽん」である。さまざまな情報が瞬時にインターネットで手に入る時代になったが、現在日本で話題になっているトピックのなから、海外の中高校生が興味をもつものを取り上げ、日本語を中心に、英語、中国語、韓国語、一つの作品をいっしょに作るという協働作業は、ただいっしょにワイワイと楽しく過ごすのではなく、交流をより意味のあるものにした。

こうした試みは、世界の中高校生の交流ウェブサイト「つながる」に継承されている。SNS(ソーシャル・ネットワークキング・サービス)を利用した「つながる」には、自分のことを語る「マイページ」とトピックごとにほかのメンバーと意見交換ができる「コミュニティ」がある。2011年8月現在、「つながる」には、21の国と地域から約1300名の中高生が参加している。異なる社会・文化・言語の背景をもつ中高生が、違いを超えてお互いを「身近な存在」と感じ、日々の生活や考えていることをやり取りしながら、他者への共感や理解を深め、自分自身を振り返り、広い視野を獲得することを目標にしている。いろいろな仕掛けを試みることで、ウェブでの交流をどれだけ深められるか、挑戦は

バランスのとれた日本紹介をするサイトはまだまだ少ない。「くりっくにっぽん」は、多様な日本をいろいろな角度、視点から紹介し、日本の人びとの姿を伝えることで、ステレオタイプな日本像を打破し、日本や日本人の固有性のみならず、普遍性や共通性を感じてもらおうことをめざしている。

## ● 共感

「『であい』フォトエッセイカフェ」では、ウェブサイト上で世界の高校生が交流することを模索した。写真教材「『であい』を見た海外の高校生の文章と写真による自己紹介」を掲載し、それを読んだ世界の高校生がコメントを書き込む。さらに直接交流を深めることをねらいとした初の試みが「カフェおきなわ」だった。「『であい』フォトエッセイカフェ」に参加した海外の高校生のなかから選ばれた7人と日本の高校生7人、計14人が沖縄県・伊是名島で交流した。

直接交流プログラムとしては、このほか、2007年に実施した「Focus on Japan 2007」がある。国内外の

続いている。

## ● 発見

第二外国語用日本語教材『好朋友』全5巻の完成を記念して、2010年3月に日本の中学生7人を「好朋友特使」として大連市に派遣した。このプログラムは(財)かめのり財団(現在、公益財団法人)が主催する中学生交流プログラムとして委託を受け実施したものである。『好朋友』に掲載されているストーリーマンガの主人公が横浜出身だったことから、派遣する中学生は、神奈川県内を対象に公募した。7人は大連の学校を訪問し、『好朋友』で日本語を学ぶ中学生と交流した。

「漢語橋 日本的高校生サマーカーキャンプ」は、中国国家漢弁が主催する世界各国の高校生を中国に招聘するプログラムの一環。TJFは企画から実施までを担っている。中国語によるコミュニケーション力の向上だけでなく、同世代をはじめとする中国の人びとの交流を大きな柱に据えたプログラムは、漢弁から高く評価されている。2011年からは、互いのことばを学ぶ日中高校生

の交流により重点をおき、日本語を学ぶ中国高校生のサマーカーンプも合同で開催している。日中の高校生がグループになり、コミュニケーション力や共に何かを作り出していく力を身につけることを目標にしている。

TJFは、中国語教育を促進するためには、教師も含め、学校や教育行政機関のリーダーに中国や中国語教育に対する理解を深めてもらうことが不可欠であると考へ、教師研修のほかに、高校の管理職や教育委員会の指導主事などを対象に、中国に派遣する事業も行っている。サマーカーンプ同様、主催は漢弁、TJFが担うのは企画と実施である。

## ●触れる

日本人にとって、隣国・隣人のことを学ぶことは、隣国あるいは隣人とのよりよい関係を築く上で、また日本や日本語を再認識するためにも重要であるとTJFは考えている。しかし、韓国で日本語を学ぶ中高生が87万人であるのに対して、日本で韓国語を学ぶ中高生はわずか九千人にすぎない。このアンバランスの大き

な要因として、日本の高校では韓国語を学ぶ十分な環境が整っていないことが挙げられる。TJFは、全国の中国語・韓国語教師と連携し、中国や韓国の政府機関によるサポートも受けながら、教材やガイドラインの制作や教師研修の実施などに取り組んできた。

これらの集大成として、2006年から取り組んでいるのが「学習のめやす」づくりである。現行の学習指導要領には中国語や韓国語教育の目標や内容の具体的な記述はない。「学習のめやす」では、21世紀に対応した新たな外国語教育を提案するとともに、高校からの中国語・韓国語教育の具体的な見直し、内容、方法を提示している。「他者の発見、自己の発見、つながりの実現」を理念に掲げ、言語、文化、グローバル社会の三領域において知識・理解中心から知識を活用し運用できる教育、そしてさらに学んだことばの話者や世界そのものとなつていくことをめざして、『わかる・できる・つながる』学習を提唱している。

「学習のめやす」を多くの教師と共有するために、2009年度から夏に5日間の教師研修を桜美林大学との共催、在日本中国大使館教育処、駐日韓国大使館韓国

文化院、駐日韓国文化院世宗学堂との特別共催で実施している。文法積み上げではなく、コミュニケーション能力を身につけるための外国語教授法を学ぶとともに、グループワークを通して実際の授業作りに取り組み内容となっている。

## ●つながる

2002年、高校中国語教師の長年の夢であった中国研修が実現した。日本の高校中国語教師のネットワーク組織である高等学校中国語教育研究会（高中研）の主催で、黒龍江省ハルビン市で開催された研修には20名の教師が参加した。TJFはこの研修の企画から実施まで全面的にサポートした。この研修の実績が、2004年から吉林大学で実施されている日本の高校中国語教員研修の共催へとつながった。

1998年、高校韓国語教師研修（韓国文化院主催）が日本で初めて行われ、その最終日に、韓国語教師ネットワークづくりが提案された。準備を進める世話人が選出され、TJFと世話人は1年にわたる検討を行い、翌

1999年の第二回研修の場で、高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク（Japan Association for Koreanlanguage Education at High Schools: JAKEHS）が設立された。TJFは、高中研とJAKEHSの事務局を務め、さまざまな事業の企画・実施に参画する一方、両者からTJFのすべての中国語や韓国語事業の実施に協力を得ている。

ここで紹介した事業を含め、TJFがこれまで行ってきたすべての事業は、内外の政府、財団、社団、企業、学校などの「組織」、そして、そこに所属するか否かを問わず、志や夢を同じくする「人びと」との連携や協働により実現し、発展させてきたものばかりです。また個人、団体からのさまざまな助成や協賛があつて初めて実現した事業も数多くあります。応援してくださる皆さまの力を具体的な事業として展開できるのは、いうまでもなく出捐企業や賛助会員による継続的かつ安定した財政面でのサポートがあるからです。この場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。

## TJFを支援して下さった方々

2011年4月公益財団法人への移行を機に、これまで旧法人の事業を支援して下さった皆さまのお名前を記して、感謝の意を表しますとともに、今後もご支援いただきますようお願いする次第です。

I & S / あかね書房 / 赤野間征盛 / アクセントチュア / 朝日広告社 / 朝日出版社 / 旭商事 / 朝日新聞社 / 朝日ソノラマ / 旭通信社 / Asia Society / ASIANA AIRLINES / アジアプレス / あしぎん国際交流財団 / あすか書房 / アスク講談社 / アストロ教育システム / 麻生寿寿子 / Association of Colleges of Education in New Zealand / 阿部通商 / American Council on the Teaching of Foreign Languages / American Forum / 荒竹出版 / アリス館 / アルク / 安藤美智子 / 五十嵐楓 / 石原久仁子 / 磯貝保博 / 井田康雄 / 市嶋純 / 井出製紙 / 伊藤和子 / 伊藤正子 / 伊藤忠商事 / 乾源哉 / 今村碩 / 岩沙昌吉 / 岩崎書店 / 岩崎美術社 / 岩波書房 / 岩本正夫 / インターコミュニケーション / イントロジャパン / ヴァージンアトランティック航空 / ヴィジョンの会 / ウォルター・タックス / 牛島通彦 / 内蒙古教育学会 / 内蒙古自治区教育厅 / 蔚山市 / 蔚山商工会議所 / 蔚山文化院 / エイ・エフ・エス日本協会 / HBI / NHK / NHK インターナショナル / MBC / 遼州製紙 / 延辺教育院 / 延辺朝鮮族自治州教育委員会 / おうふう / 王子製紙 / 旺文社 / 大川修 / 大阪市立工芸高等学校撮影研究所 / 大阪教育委員会 / 大空社 / 大津明美 / 大手広告通信社 / 大村彦次郎 / 岡田洋介 / 岡本 / 沖繩県伊是名村 / 沖繩県伊是名村教育委員会 / 奥沢茂 / オックスフォード / 学出版局 / オリコム / オリファ / 偕成社 / 外務省 / Council of Chief State School Officers / 架空社 / 学習研究社 / 笠倉弘道 / 鹿島石油 / 柏書房 / 課程教材研究所 / 加藤貞善 / 角川書店 / 神奈川県教育委員会 / 川崎県私立中学高等学校協会 / 神奈川県立外語短大付属高等学校 / カナダ・アジア太平洋基金 / 金子書房 / 金光貞治 / 神山五郎 / かのりの財団 / 川口晋平 / 韓国教育財団 / 韓国観光公社 / 韓国国際交流財団 / 韓国日本語教育研究会 / 関西大学外国語教育研究機構 / 神崎製紙 / コンタス航空 / 吉星 / 吉林省教育学院 / 吉林省教育国際交流協会 / 吉林省教育厅 / 吉林省大学外国語学院 / 吉林テレビ局 / 紀伊國屋書店 / キブス箱 / 木村三郎 / 木村良夫 / 教育

社 / ぎょうせい / 共同通信社 / 杏文堂 / 共立ビル / 協和銀行 / 協和広告 / 慶熙大校国際教育院 / キングレコード / 近鉄エクスプレス / 金の星社 / Queensland LOTE Centre / 日下明 / 国定美佐子 / KUMHO タイヤ / くもん出版 / 樽沼繁明 / くろしお出版 / 黒柳製本 / 慶尚日報 / KBS / 研究社 / 堅省堂 / 小磯明 / 弘研 / 光生館 / 江蘇省テレビ局 / 江蘇省南京市人民教育局 / 講談社 / 講談社インターナショナル / 高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク / 高等学校中国語教育研究会 / 豪日交流基金 / 光洋製本所 / 国際日本語普及協会 / 国際協力機構中国事務所 / 国際協力機構 / 国際交流基金 / 国際交流基金ソウル日本文化センター / 国際交流基金日米センター / 国際交流基金バンコク日本文化センター / 国際交流基金北京事務所 / 国際交流基金ロンドン事務所 / 国際ビジネスコミュニケーション協会 / 吉大社 / こくま社 / 国立国語研究所 / 黒龍江省教育院 / 黒龍江省教育厅 / 黒龍江大学 / 湖北省テレビ局 / 小峰書店 / 近藤親司 / 斎喜要 / 在上海日本国総領事館 / 在瀋陽日本国総領事館 / 在大連出張駐在官事務所 / 在瀋陽日本国総領事館 / 在タイ日本国大使館 / 在中国日本国大使館 / 在日ニュージーランド大使館 / 在日本国大使館 / 在日本中国大使館 / 在日本中国大使館教育処 / 幸臨一英 / 在ヒューストン日本国総領事館 / 在福岡中国総領事館 / 在釜山日本国総領事館 / 在ボストン日本国総領事館 / 笹川隆 / 佐々木忠孝 / 佐々木倫子 / 佐々木都 / 佐藤誠 / 佐藤誠一 / 佐藤寿一 / 三一書房 / 山喜房仏書林 / 三幸 / 三幸社 / 三修社 / 三省堂 / サントリー / 産能短期大学 / 山陽国策パルプ / 三和銀行 / 静保美 / 実業家の日本社 / 渋谷春一郎 / 社会思想社 / ジャパンタイムズ / Japan 2001 実行委員会 / The Japan Festival Education Trust / 上海外国語大学 / 上海市教育委員会 / 上海日本人学校 / 集英社 / 十條板紙 / 十條製紙 / 首都師範大学外国語学院 / 主婦と生活社 / 主婦の友社 / 小学館 / 豪華房 / 報船三井 / 商船三井 / ロジステイクス / 情報センター出版局 / 商務印書館 / 高友倶楽部 / 沈沈社 / 新弘社 / 新潮社 / 人民教育出版社 / 菅原勇 / 杉山恒男 / 鈴木和夫 / 鈴木孝夫 / 鈴木俊男 / 鈴木 / スペースコム / インターコミュニケーションズ / 住友商事 / スリーエネット / 駿河台出版社 / 西東社 / 成美堂出版社 / 聖文社 / 誠文堂新光社 / 関根つとむ / 関根正之 / セコム / 全国高等学校文化連盟 / 全国都道府県教育委員会連合会 / 全国都道府県教育長協議会 / Center for Applied

Japanese Language Studies / 千駄ヶ谷日本語教育研究所 / 全日本空輸 / 全日本写真連盟 / 専門教育出版 / 創芸 / 創元社 / 草思社 / 創拓社 / ソーワ広告 / 第一生命保険相互会社 / 大映 / 大永紙通商 / 大王製紙 / 第三書房 / 大快館書店 / 大正製薬 / 大昭和製紙 / 大同生命国際文化基金 / 大日本印刷 / 大日本図書 / ダイヤモンド社 / 大連外国語学院 / 大連市教育学院 / 大連市教育局 / 大連日本商工クラブ / 高木とみ子 / 高田茂樹 / 高頭としこ / 竹歳一郎 / 田中宏子 / 田中暢 / 田中則明 / 田村嘉男 / 淡交社 / 筑摩書房 / 千能千恵美 / チャールズ・イー・タトル商会 / 中央宣興 / 中国音楽家協会 / 中国教育学会中国語教育専門委員会 / 中国語教育 / 中国語教育学会 / 中国語教育研究会 / 中国語教育国際交流協会 / 中国教育部 / 中国語教育国際交流センター / 中国国際教育委員会 / 中国国際観光局東京 / 中国国際航空会社基礎教育司 / 中国国際漢弁 / 中国国際民族事務委員会 / 中国国際対外友好協会 / 中国中央テレビ局 / 中国駐大阪総領事館 / 中国駐札幌総領事館 / 中国美術家協会 / 駐日韓国大使館 / 駐日韓国文化院 / 駐日韓国文化院世宗学堂 / 中日友好協会 / 長春市教育委員会 / 土屋昭覚 / 帝国書院 / Department of Education of Western Australia / Department of Education and Training, Victoria / 電通ヤング・アンド・ルビカム / 展望社 / 桃園書房 / 東京倶楽部 / 東京こども図書館 / 東京書館 / 東京私立中学高等学校協会 / 東京ゼロックス / 東京堂出版社 / 東京都教育委員会 / 東京豊海冷蔵 / 東京農業大学第一高等学校 / 東京国際交流財団 / 童心社 / 東邦生命保険相互会社 / 東洋英和女学院 / 東洋経済新報社 / トータルメディア開発研究所 / トーハン / トキワ / 常盤産業 / トキワ宣弘社 / 徳島高義 / 特殊製紙 / 徳間書店 / 栃の葉書房 / 出版印刷 / 出版印刷三幸会 / 富山県 / 内外紙業 / 永井明 / 中井博子 / 長尾江妙子 / 川直也 / 中澤保夫 / 中西泉 / National Council of Japanese Language Teachers / National Foreign Language Center / 名取三郎 / 橋原万里子 / 南京市人民教育局 / 南京市テレビ局 / 南京日報 / 二期出版 / ニコマラ販売 / 西郷博子 / 日亜商會 / 日外アソシエーツ / 日韓親善協会 / 日韓文化交流基金 / 日航財団 / 日商岩井国際交流財団 / 日中友好協会 / 日本文化 / 二宮靖雄 / 日本アイ・ピー・エス / 日本・アジア学術交流基金 / 日本紙業 / 日本加工製紙 / 日本紙パルプ商事 / 日本経済

通信社 / 日本語教育振興協会 / 日本語インスティテュート / 日本航空 / 日本交通公社 / 日本語教育学会 / 日本語教育振興協会 / 日本金児童図書館評議会 / 日本実業出版社 / 日本出版販売 / 日本出版貿易 / 日本書籍出版協会 / 日本信託銀行 / 日本臓器製薬 / 日本通運 / 日本万国博覧会記念機構 / 日本文芸社 / 日本ユネスコ協会連盟 / New South Wales Department of Education and Training / ニュージーランド航空 / 根元佐和子 / 根本安雄 / ノースウエスト航空 / バイオニア / 白水社 / 白泉社 / 博友社 / 橋上公彦 / 畑野文夫 / 服部哲也 / パベル / ぱるす出版 / ハルビン市教育委員会 / ハルビン市教育学院 / B&CI / 東浦彰 / 東銀座地所 / 評論社 / 平賀純男 / 広島県立庄原格高等学校写真部 / 武漢市出版社 / 武漢市人民政府教育委員会 / 武漢市テレビ局 / 福井特殊紙 / 福音館書店 / 福島正子 / 福武書店 / 富山房 / 富士化学工業 / 富士写真フイルム / 富士ゼロックス / 藤田実 / 富士フイルムアジア / 富士フイルムイメージング / 婦人画報社 / 文士秀敏 / プリティッシュ・カウシル / フレーベル協会 / Program for Teaching East Asia / Professional Support and Curriculum Directorate / 文化外国語専門学校 / 文化出版局 / 米日財団 / 平凡社 / 平和紙業 / 北京人民广播电台 / 北京市人民対外友好協会 / 北京人民放送局 / 北京青年報 / 北京テレビ / 北京日報 / 北京日本人会 / 北京晩報 / 勉誠社 / 保育社 / 北星堂書店 / 保坂博 / 北海道 / 北海道高等学校中国語教育研究会 / 保月滋 / ポプラ社 / 堀口準男 / ほるぶ出版 / 本間製紙 / 凡人社 / 毎日新聞社 / 増尾貴子 / 松岡久美子 / 松岡直昭 / 松下電器産業 / 松葉義孝 / 松原正信 / 丸書 / 丸年社 / みずうみ書房 / みずび銀行 / 三菱銀行 / 三菱銀行国際財団 / 三菱製紙 / 三菱UFJ国際財団 / 漆原紙商事 / 宮川智雄 / 宮城県塩釜高等学校写真部 / 宮本芳行 / むぎ書房 / 武蔵野書房 / 明治書院 / Melbourne Centre for Japanese Language Education / 盛田雄二 / 文部科学省 / 安成就三 / 山口至剛 / 山口進 / 山野勝 / 佑学社 / 雄山閣出版 / 有斐閣 / 有朋堂 / ユニ・デザイン / ゆまに書房 / 養徳社 / 横浜市立横浜商業高等学校 / 吉川弘文館 / 吉野勝一 / 読売新聞社 / りそな銀行 / リブリオ出版 / リブリオ / 遼寧教育院 / 遼寧省教育厅 / 理論社 / ルックジャパン / 和光高等学校写真部 / 渡辺満枝

(敬称略、五十音順。団体名、法人名等はご支援いただいた時点のものです。)

## TJFを支援して下さった方々



## 公益財団法人国際文化フォーラム

小中高校生が21世紀の多言語多文化共生社会を生きる力を身につけることをめざして、海外の小中高校の日本語・日本理解教育の促進事業、国内の小中高校における外国語・多文化理解教育の促進事業、国内外の小中高校生や教育関係者の交流事業を行っています。

設立 1987年6月22日  
2011年4月1日、公益財団法人に移行

出捐企業 王子製紙(株)、(株)講談社、大日本印刷(株)、  
凸版印刷(株)、日本製紙(株)、(株)三菱東京UFJ銀行

基本財産 20億円

賛助会員 伊藤忠紙パルプ(株)、(株)NHK出版、王子製紙(株)、鹿島建設(株)、春日製紙工業(株)、共同印刷(株)、キングレコード(株)、近代美術(株)、(株)廣濟堂、(株)講談社ビジネスパートナーズ、(株)光文社、興陽製紙(株)、国際紙パルプ商事(株)、(株)國寶社、三光製紙工業(株)、(株)資生堂、住友信託銀行(株)、誠和製本(株)、(株)世界思想社教学社、第一紙業(株)、(株)第一通信社、大二製紙(株)、大日本印刷(株)、(株)大洋社、中越パルプ工業(株)、(株)電通、(株)トーハン、図書印刷(株)、凸版印刷(株)、豊国印刷(株)、日興紙業(株)、日商岩井紙パルプ(株)、日本製紙(株)、日本出版販売(株)、日本図書普及(株)、(株)博報堂、(株)フォーネット社、富士ゼロックス東京(株)、二葉製本(株)、北越紀州製紙(株)、丸王製紙(株)、丸住製紙(株)、丸紅紙パルプ販売(株)、(株)三井住友銀行、三菱製紙販売(株)、(株)三菱東京UFJ銀行、(株)ムサシ、(株)本貴、(株)彌生洋紙店石井雅男、市原徳郎、岩野忠昭、大内幹雄、小田倉正典、小貫邦夫、唐沢正彰、小池武久、鈴木茂次、高崎孝、高嶋伸和、浜田博信、細谷美代子、松井外恵、柳川敦重  
(敬称略、五十音順、2011年10月現在)

### であい、つながる

二〇一二年一月発行（非売品）  
発行所 公益財団法人国際文化フォーラム

東京都文京区音羽1-17-14 音羽YKビル3階 〒112-0013  
Tel 03・5981・5226  
Fax 03・5981・5227

E-mail [forum@ijfor.jp](mailto:forum@ijfor.jp) <http://www.ijfor.jp>

構成 (株)ニューズワーク

### 寄附のお願い

TJFは、皆さまのご協力、ご支援により事業活動を行っております。財団の経済的基盤を強固にし、事業活動をさらに充実・発展させるため、賛助会員制度（年会費制、法人10万円、個人10万円）を設けています。皆さまのご加入をお待ちしております。

TJFの事業全体への寄附（一般寄附金）、「サマーキャンプ」「学習のめやす」「つながる」「くりっくにっぽん」など特定の事業への寄附（使途特定寄附金）もお願いしております。当財団への寄附金は、税制上の優遇措置が受けられます。詳しくはウェブサイトの「寄附のお願い」をご覧ください。

「寄附のお願い」をご覧ください。 [www.ijfor.jp/kihuhm1](http://www.ijfor.jp/kihuhm1)